

さて、中国は昨年8月末、日本の福島原発処理水海洋放出に難癖をつけていらい、日本の水産物全面禁輸を継続してきました。それが急に、態度を転換したことと9月18日に起きた深圳の日本人小学生刺殺事件と関係あるのではないかと、という見方も出ています。

中国は、処理水海洋放出に対して、批判の姿勢は崩していませんし、安全であるとも認めていません。なのに、禁輸解除するとしたら、もともと、この禁輸措置も本当に、水産物の安全性を懸念してのことではなく、極めて政治的な手段として行っていたということになります。

この禁輸解除に関しては昨年11月の岸田・習近平会談以降、専門家同士で建設的な態度で交渉する、ということになっていました。7月に日中外相会談で、独立したサンプリングと長期国際モニタリングメカニズムの確立が呼びかけられました。日本側はもしIAEAが日本の主権を擁護する形で参与し、調査の客観性と公正性が担保されれば、中国の要求を満足させることができると考えていたようです。

ですが、タイミングがタイミングだけに、中国が、ある意味、日本および日本人の機嫌をとろうとして、この禁輸解除の決断を急いだのではないかと、という見方もあります。



ここで深圳の小学生刺殺事件について、再度触れたいと思います。

この深圳の小学生刺殺事件についての私の考えはJBプレスにまとめた通りですので、よろしかったら一読ください。

<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/83279>

この事件は予想以上に、中国社会でハレーションを起こし、中国政府としては、この事件の矮小化、沈静化にかなり苦心しているようです。

中国に反日情緒が醸成され、中国共産党政府が社会不満の矛先を自らに向かないように日本や日本人に誘導することは今に始まったことではありません。

そして、この社会不満のはけ口としての反日誘導は、時代に合わせて強弱をつけることはあってもやめることはできません。反日は共産党のレジティマシーを担保する重要なイデオロギーだからです。反日誘導をやめるとき、それは共産党独裁の終焉のときだと思えます。

ただ今回の件に関していえば、長年の反日教育にもかかわらず、政府が予想する以上に、犠牲になった男児への同情論が盛り上がりました。日本人小学校の前には、全国から献花やお菓子、手紙が届き、中にはわざわざ花をもって校門前にたたずむ中国人もいました。男の子に「深圳人としてごめんなさいといたい」といったメッセージもたくさん寄せられていました。

20日の時点で1000以上の花束がよせられました。同時に、ネット上では、この事件の背後に、長年の反日教育、愛国教育があるという指摘も結構あり、暗に行き過ぎた反日教育がこうした悲劇を誘発したのではないか、という政府非難にも聞こえそうな意見もありました。

こうした同情論がさらに高まったのは、20日、中国の微博上で、「犠牲になった男児の父親による中国語の手紙」なるものが拡散されたこともあるようです。

私はこの手紙が本物かどうかは確認できていません。ですが、この手紙は中国人のネットユーザーたちの心を動かしたことは、多くの同情、慰めのコメントが殺到したことから推測できます。

手紙の内容は標準的な中国語で書かれ、犠牲になった男の子が日本人の父親と中国人の母親の間に生まれたハーフで、3歳まで母親の実家で育ち、中国語も日本語も流暢に話せ、日本人であり中国であったことなどにも触れられていました。そして、この男の子が「大きくなったらお父さんみたいになりたい」と語っていたことなどが書かれています。

この父親は、日中の架け橋たらんという情熱をもって日中貿易にかかわる仕事をしてきたようで、「中国を恨まないし、日本も恨まない。国籍がどうであれ、両国とも私たちの国家です」「ねじまがった思想の卑劣な人間の犯罪行為によって両国関係が破壊されてほしくない」としたためられていました。

さらに「私は息子が誇りに思える人間であるよう全力を尽くすことしかできない。継続して日中両国の相互理解のためにささやかな貢献をしていくこと、このことこそ最愛の息子に対する贖罪であり、犯人への報復である」としています。

息子を失った絶望のどん底にありながら、日中関係への影響を気遣い、中国社会にメッセージを送るこの手紙に、多くの中国人が共感し、男児家族への同情論がますます盛り上がりました。

ちなみに手紙の全文については、レコードチャイナが翻訳を掲載しています。

https://topics.smt.docomo.ne.jp/article/recordchina/business/recordchina-RC_940890

日中国際結婚の夫婦であれば、中国社会のこともよく理解し、こうした事件がときに日中の仇敵感情を刺激したり日中外交関係に大きな影響を与えたりする可能性もあることを分かった上で、中国社会をなだめるメッセージを出す可能性はあるかもしれませんが、あるいは完全なフェイクの可能性もあるでしょう。その場合、中国当局サイドが、中国世論を誘導するために流すフェイク情報かもしれませんが、あるいはアンチ中国共産党の在外華人が、共産党の行き過ぎた反日教育を印象付けるために流す可能性もあるでしょう。

結果的な現象をいうと、中国のSNSでこの手紙が引用され、男の子や家族への同情論が盛り上がり、反響が大きかったことで、微博はこの手紙の投稿や関連のコメントを削除しました。

そして学校前の花束の山も当局が撤去されました。撤去しても、また花束が献花され続けていますが。

この「父親の手紙」やそれを引用したりコメントしたりするネット投稿が撤去され、献花の花束が撤去される理由は、建前はさておき、犠牲の男児への同情論が盛り上がりすぎると、最終的に矛先が行き過ぎた反日教育を指導した共産党政府の政策が悪い、という方向に行きかねないという懸念があるからだと思います。

中国では集団的な哀悼行動が反政府的なデモに発展する歴史があります。天安門事件は胡耀邦哀悼から始まった民主化デモに対して行われた武力鎮圧でした。白紙革命も新疆・ウルムチ市でおきたアパート火災の犠牲者追悼と絡んでいます。江沢民がなくなった時も李克強がなくなった時も、当局は大衆の追悼行動に目を光らせていました。

つまり中国当局としては、この事件が日中関係に影響を与えることも心配しているし、かといって被害者の日本人家族側に同情が集まりすぎて、中国が長年行ってきた歴史教育やイデオロギー教育が、行き過ぎだという批判の声がおきても困る。早々に、社会から忘れ去られたい事件なのです。そのためには結局情報封鎖しかありません。

そもそも、こうした凶悪事件の背景には、中国経済社会の不安定化と不満の拡大という世相があります。この数年、中国は数え切れない「社会報復性テロ」ともいえる暴力事件が起きています。犯人の多くが無職男性。経済の悪化により仕事を失ったり、給与が未払いであったり、財産を差し押さえられるなどの不条理に対し、その恨み、不満を社会に知らしめるために、多くの無関係の人にたいして暴力をふるうような犯罪です。

今回の事件については44歳の無職の鍾という苗字の人物が現行犯逮捕されています。動機はまだ発表されていませんが、深圳市公安当局情報によれば「前科」があったそうです。その前科とは「公共電信施設破壊」だとか「社会秩序擾乱罪」などの罪で、こうした罪状はしばしば、当局にとって都合のわるい人間に不条理に課せられるケースが多いです。また一部ネットのセルフメディアよれば、自分の持株会社の経営に問題がおき、持株権が奪われ、クレジットローンが滞納して社会信用システム上のブラックリストに入った、とか。まさに昨今の中国経済の悪化の直撃を受けているような人物です。

こうした社会不満をこじらせるような人間が増えているのは、明らかに共産党政治政策の失敗なので、こうした社会不満の矛先はいつでも容易に中国共産党にむく可能性があります。

なので、中国はこの数年、社会の不満の発散先に、日本を悪者にするような世論誘導を強めています。日本がターゲットになるのは、日中の戦争の歴史問題、尖閣など領土をめぐる問題などで伝統的に日本を攻撃しやすい材料があること。最近ではこれに加え、福島原発の「核汚染水海洋廃水」の環境汚染問題、日本人スパイ問題、台湾独立派の頼清徳の関係強化などの要素があります。

ですが、大衆への日本への憎悪が高じて、日本人がターゲットになるような犯罪が再発するのも中国当局にとっては都合が悪い。日本政府から事件の再発を求められているのに、再発してしまうと、中国政府の統治力のなさを露呈することにもなりますし、中国外交のノイズでもあります。

だからといって、事件の犠牲者に同情が集まりすぎるのも、中国がこれまでやってきた反日教育が行き過ぎたと言われているのと同様で、これが高じると不満の矛先が中国当局にむくかもしれない。